

# 登山・登攀の記録

## 北アルプス 西穂高岳～奥穂高岳小規模ポーターの実験

日時:1957年3月10日～3月28日

メンバー:CL 高田直樹、角倉光彦、山田嘉和、大浦範行

### 概要:

#### (西穂高～奥穂高稜線の極地法合宿の目的及び意義)

この合宿が遂行されるまでには種々の抵抗があり、又合宿自体、我が部にとって大きな問題をはらんでいた。我が部が設立されて以来、今まで数多くの山行があったがそれらの内容を見ると、高所露営即ち、3000m級の稜線での露営による冬期の合宿訓練というものが、殆んどなかった。勿論その当時の部の内容から考えてそれは当然の事であった。だが部というものを一貫した流れとして考える時、それらの諸先輩によって築き上げられた貴重な体験が積重ねられ部自体が大きく前進しつつあったことも明らかなことである。そして、これら貴重な体験を一つにまとめると同時に、更に次の段階へと進みうるに必要な自信と力を養う為にもどうしても積雪期の高所露営を行う必要があった。これらの目的を満足し得る場所として選んだのが、西穂高～奥穂高稜線である。ここは、記録的にはさほど価値のあるものではないが、我が部にとっては、大きな意義がある訳である。このような重要な時期の合宿であるにも拘らず、いざ合宿遂行という段になり参加者が多数減ったことは、実に淋しいことである。しかし、小人数でも予定通り合宿が行われ成功したことは実に意義深いものとなった。

#### (計画概要)

行動日数を15日間とし、停滞日数を10日間取り、行動予定を立てた。立案に当り、冬季にこの地方での経験者は我が部では非常に少なく勿論参加者はすべて未経験であった。それだけに計画は慎重を期し、研究に長時間取った。そのため準備期間が削られ、更に小人数でそれを行なった為、出発前には志気を奪われた観があった。しかし、一度山に入った時我々は目的遂行の為燃えるが如き闘志で合宿を開始した。合宿中の行動計画は三段階に区分した。その一段階は西穂山荘までの高所露営に必要な食糧装備の荷揚げである。第二段階は高所露営の遂行及び奥穂高岳のアタックである。第三段階は撤収期である。装備については燃料として500cc 単位に石油を缶詰にしたものを用いた。また食糧の高地食は生そば中心に計画を立てた。それ以外に目新しいものは無かった。小人数であること、準備が円滑に行かなかったこと等の理由で意外な重荷になったことに少し計画の無理があった。大体1人の荷揚げ重量は25貫となり西穂山荘までのボッカは1人12～13貫ずつに分けて行なうことにした。この場合4人がフルに動かねばならず一人の落伍者がもし出たら合宿を放棄せざるを得なくなり、それだけに第一段階中の各人の体力消耗ということが非常に心配せられた。

### 記録

3月10日

沢渡(10:30)－山吹トンネル(11:00/12:00)－坂巻温泉(14:30/15:30)－山吹トンネル(15:20/16:40)－坂巻温泉(17:50)

島々駅宛に既に送ってあった半数の荷物をバスに積込み、雪が疎らにある冷々とした島々を後にした。荷物の一部を沢渡に置き、15貫の重荷に喘ぎつつ、それでも久方の残雪に意気高々と出発。途中山吹トンネル内に荷物の一部をデポし、

ここで山での最初の昼食に舌鼓を打つ。山吹トンネルの出口近くは天井から銀色に輝く鐘乳石の如くツララが垂下り美しかった。休憩後、予定通り中の湯まで行くつもりであったが坂巻から先はデブリにより急に道が悪くなり、第一日目でもあり、無理をせず坂巻温泉泊りにした。坂巻温泉で小休憩後、再び山吹トンネルヘデポの荷物を取りに下る。その頃より気温上昇し風が出てくる。これからの天候状況が心配される。

## 登山・登攀の記録

3月11日 高曇

坂巻(7:35) — 沢渡(8:50/10:20) — 坂巻(14:00/16:15) — 釜トンネル(17:50/18:10) — 坂巻  
全員朝早く沢渡の荷上の為下る。沢渡からの荷上時に、十数人の神戸大学山岳部パーティに会う。気合の入った彼らを見て、我々も元気づけられ出発する。夕刻、坂巻に荷物を集結、夜道を覚悟で更に、釜トンまで荷物の一部をボッカする。全員疲労が激しくバテ気味である。

3月12日 快晴

坂巻(9:00) — 釜トン(9:40) — 坂巻(10:05/17:00) — 釜トン(17:50) — 坂巻(19:00)

高田、昨夜から腹痛を訴える。全員体力の消耗著しいため、昼間ゆっくり休憩を取る。朝と夕方、2名ずつで釜トンまでボッカする。

3月13日 快晴後曇

坂巻(7:00) — 帝国ホテル(14:50/15:30) — 釜トン — ホテル(19:30)

いよいよ今日は待望の穂高岳の見える上高地入である。元気よく全員出発。釜トンの荷物を加えて上高地へ……。釜トン出口はデブリで非常に状態が悪いと聞いていたが案外簡単に通過できた。堰堤で小憩。デブリの上でスキーを楽しむ。ここからスキーを着け河原の中を腐った雪に喘ぎつつ前進する。大正池近くから、快晴の空に目指す西穂 — 奥穂連山がくっきりと認められ、我々の胸を踊らせた。ホテルで小憩後、全員釜トンの荷を取りに下る。就床が遅くなったが全員ぐっすり眠る。夜中から雨が降り出す。

3月14日 小雨のち晴

高田、角倉:ホテル(8:30) — 西穂山荘(15:30/16:00) — ホテル(17:00)

山田、大浦:ホテル — 釜トン — ホテル。

山田、大浦は釜トンの荷上にスキーで下る。高田、角倉は西穂山荘へ向け荷上。朝は小雨が降っておったが風が出てきたので晴れると見当をつけ出発。ルートは夏道通し。夜来の雨で、雪は全く締まっておらず更に10時頃から照り出した日光のため雪の状態非常に悪く、西穂山荘まで大変でこずる。特に尾根に取付くまでの状態は悪く、膝ま

で潜る湿雪と落下するスノーブロックに悩まされ、西穂山荘に着いたのが午後3時過ぎ。このような状態が続けば非常にこれからの荷上にてこずるのではないかと案じられたが、帰りは温度が下り雪も締り、飛ぶが如く一挙に上高地へ下る事が出来た。この分なら状態さえ良ければ西穂山荘への全員集結も間近だとホテルで語りつつ4人は床に就く。

3月15日 薄曇

ホテル(8:00) — 西穂山荘(11:50/12:30) — ホテル(13:55)

全員西穂高山荘までボッカ。昨日に比して非常に雪の状態よく、昼過ぎには西穂山荘に着く。ボッカ後、ホテルに着いたのは2時過ぎでまだ充分時間があつたが全員の疲労も著しいので午後ゆっくり休養を取り明日への体力を養う。

3月16日 快晴

ホテル(7:55) — 西穂山荘(12:00) — デポ地点(15:30/15:50) — 西穂山荘(17:10)

今日は全員西穂山荘集結の日である。天気はすばらしい快晴で雪の状態も幸いに良く、正午には西穂山荘に着いた。余りすばらしい天気なので露営地の偵察を兼ねて露営用具の一部をボッカすることにする。独標から続く雪と岩の尾根を眺めつつ高鳴る胸をおさえてアイゼンを着ける。西穂高岳より一つ手前のピーク近くにデポ。PIV付近にC1地を設けるように見当をつけ引返す。

3月17日 晴のちみぞれ

高田、山田:西穂山荘(9:00) — 西穂高岳(12:00) — C1(13:00/14:30) デポ地 — C1

角倉、大浦:西穂山荘 — C1 — 西穂山荘。

全員 C1設営に向う。重荷に初めての稜線を慎重に前進。西穂高岳頂上附近に差し掛かった頃より飛驒側からの風が著しくなり天気悪化の兆候が現われる。西穂高からPIVへかけての下りに、大阪府立大学山岳部のFixザイルがあり、我々はそれを拝借しPIVの頭に全員立つ。ここをC1地と定め飛驒側から吹きつける風の中でC1の設営を行う。設営中よりみぞれ混じりの雪が降り出し、視界が利かなくなりだしたので大浦、角倉は西穂山

## 登山・登攀の記録

荘へ引返す。高田、山田はデポ地の荷を回収後、稜線での第一夜を明かす。夜半より降雨。

3月18日 風雪

停滞 西穂山荘:角倉、大浦 C1:高田、山田、昨夜の雨の為テント内は厚さ 2mmの氷が張りつめている。山田はキジ打の時、西穂高沢第一ルンゼ方向へスコップ 1本を落とす。この失敗はC2設営時に支障を来す恐れがあり、先が案じられる。

3月19日 吹雪

C1(9:30)－西穂山荘(11:30/13:30)－C1(16:30)

高田、山田は激しい風雪の中をC1の荷上に西穂山荘へ下ってくる。角倉、大浦はこれを待ち受け全員C1に向う。午前中、稜線の雪は堅くシュピツツェも受けつけない所もあったが午後より風も弱まり飛驒側から晴れ出す。夕方全員C1入り。夕焼に輝く前穂高岳の雪壁をすぐ前に望みつつ、食糧用の雪洞を掘る。いよいよ高所露営が始った訳である。テントの出口から眺められる前穂や明神岳の偉容に4人は満足しつつ、これからの行動について語り合う。

3月20日

高田、角倉:テントキーパー

午前中、濃いガスの為、沈澱。午後より高田、角倉はPⅢまでに2本のザイルフィックスを行う。大浦は少量のデポ地の残りの荷を取りに行く。

3月21日 快晴

温度高く、雪が非常に腐っており PIVからやや下った所の昨日ザイルフィックスを行なった急な雪稜で高田スリップ。しかしFixザイルが充分しっかりしていたので無事。ただ全員疲労気味なので偵察はこの先角倉、大浦が行くこととし、高田、山田は C2 の準備の為テントに残ることにした。角倉、大浦は間ノ岳まで偵察後 C1 へ戻る。

3月22日 高曇

停滞。ラジオは「低気圧九州にあり」と報じている。C2 設営、アタック、C2 撤収には丸2日を要する。低気圧通過によって続くであろう2日間の天気を待つことにする。全員テントでぜんざいに舌鼓を打ちながら山田を中心に愉快的話が始まる。東

京歯科大学のパーティがすぐ近くにカマボコのテントを設営。この PIVの頭も賑やかになる。

3月23日 快晴

高田、角倉:C1(7:30)－C2(11:30)

大浦、山田:C1－C2－C1

じっくりとねばった甲斐があった。すばらしい天気である。全員C2設営の為に出発。稜線での重荷に慎重に雪と岩の尾根を歩いた。間ノ岳まではFixザイルもあり、又天狗岩の登りは雪が全然なく、夏の針金が全部露出していたので、難なく通過できた。しかし天狗の下りは重荷のため緊張した。安全を期してアンザイレンをし、飛驒側の急傾斜面を下った。雪が腐っている為、しばしばアイゼンの雪をピッケルで払いつつ下った。昼前、天狗のコルに到着。丁度天狗岩側に巾 1.5m、長さ4mの雪洞が掘られていたのでこれを改修してC2とすることに決めた。昼食後山田、大浦は C1へ引返す。高田、角倉は明日のアタックの準備に午後に費やす。雪洞の中はずいぶん冷える。晩食のペミカンとソバは我々の体を温めてくれ、明日へのアタックの為に安らかな眠りへと導いてくれた。

3月24日(曇)

高田、角倉。C2(7:00)－奥穂高岳(9:40/10:20)－C2(12:30)－C1 山田、大浦:C1－C2－C1

今日はアタックの日である。凍える手でアイゼンのテープを締め出発する。空には雲が多いが天気はもちそうである。ジャンダルムまでは殆んど岩が露出しておりぐんぐんピッチを上げてとばす。問題のロバの耳は夏道通り飛驒側を巻く。ここには芝浦工大のFIX(細引)があり難なく通過する。ここで奥穂高岳方面から来た多数のパーティに出会う。奥穂頂上に10時前に到着。槍ヶ岳、前穂高岳とすばらしい北アルプスの展望である。北穂高まで行きたい気持ちに駆られるも自重する。奥穂頂上から飛驒側は蒼氷で我々の擦り減ったアイゼンのツアッケは全然利かない。記念撮影後、下山する。途中角倉はロバの耳とジャンダルムの間近くでスリップ。シャフトストップで事無きを得た。アタックを終え緩む心に鞭打ちC2へと向う。C2近くに差し

